

北海道からおもちゃ屋さんがやってきた

北海道の小樽で、おもちゃ屋さんを経営しながら、おもちゃを乗せたバス「キダーリープ号」で、幼稚園などをまわり、子どもたちの遊びの支援をしているキダーリープさん。そんな皆さんが、東北の復興を支援するため、遠く北海道からキダーリープ号で福島までやってきてくれました。そして、私たちビーンズふくしまとも、一緒に何か活動できないかと声をかけてくださり、この度、その夢の企画第1弾が実現したのです。今回は、とりあえず大人も子どもも、おもちゃで思いっきり遊んじゃおう！ということで、フリースクールやピアサポのみならず、そしてスタッフ達も一緒になっ

て、あれやこれやと楽しみました。コマやあやとりといった昔の遊びから始まったかと思えば、創作が好きなのは「カブラ」という、積み木のような木の板で驚くような作品を創ったり、頭をフル回転して楽しむカードゲームや、反射神経を試すテーブルゲームに夢中になったりと、本当に飽きる暇がありませんでした。そして、たくさんのおもちゃと、楽しさの余韻をお土産に、キダーリープ号は次の目的地へ向かったのです。あれから、フリースクールでは、頂いたおもちゃを使い、新しいルールなんかも取り入れながら、日々大切にに使わせて頂いています。子どもたちは、「しりとり



ワードゲーム」がお気に入りみたいです。こんなにたくさんのおもちゃを頂き本当にありがとうございました。また、一緒に活動できることを楽しみにしています。



これからの活動予定

●3月15日(土)フリースクール「卒業と成長を祝う会」

11:00~14:00 フリースクール

●3月26日(水)~27日(木)フリースクール春合宿

※3月29日予定していましたが「ビーンズ親の会」は都合により、お休みさせていただきます。

編集後記
「今年の雪はすごかった!!」日差しがだんだん伸びてきて、「春が近いかなあ」と思ったところに降った大雪でした。思いもかけぬことに、あの大雪の一日を果敢と過ごした方も多かったのではない

でしょうか。ビーンズでも、家にたどり着くのに10数時間かかった人、「雪って怖い」と本気で思った人、家族総出で雪かきした人と悲喜こもももの一日だったようです。そんな体験談を聞いてい

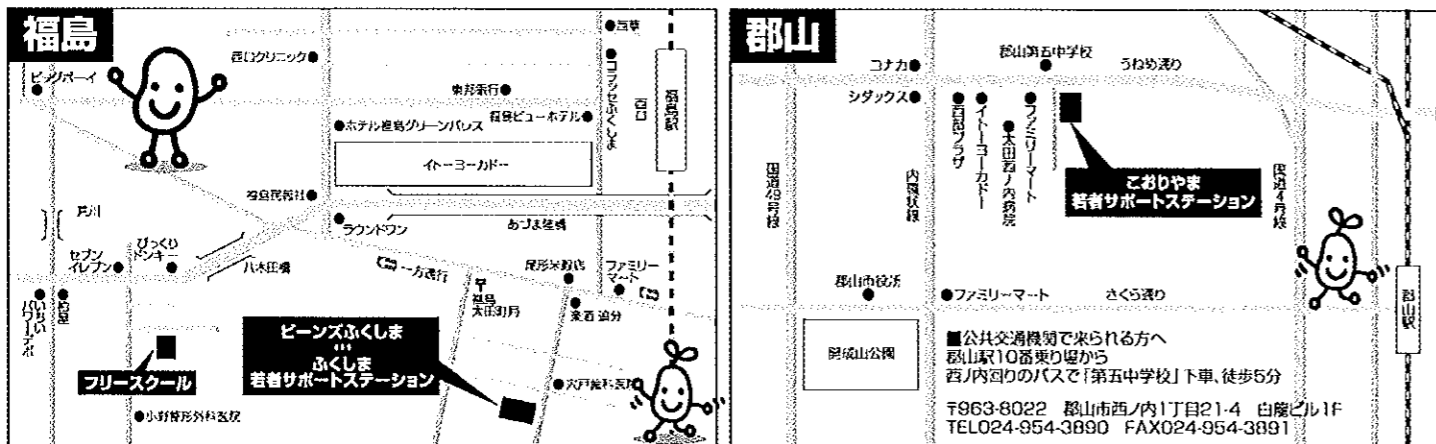
るとこの大雪はその人によって様々な体験をされ、それぞれの記憶の中の風景になるのだなあと思いました。同じ雪が人によって違う記憶になるということは面白いなあ...などと思ったのです。

ご寄付ありがとうございます

今年、個人・団体合わせて寄付金として、5,712,903円いただきました。

キャンペーン等にご協力いただきまして、ありがとうございました。

皆さんの支えに心から感謝申し上げます。(ビーンズ一同)



●ビーンズふくしまのホームページ はこちらへアクセス → <http://www.k5.dion.ne.jp/~beans-f/>

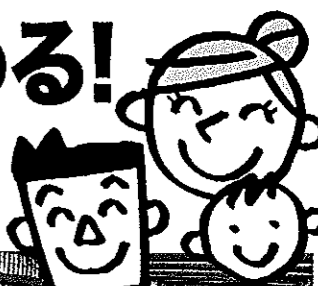
ビーンズ通信 Vol.62

●発行日/2014年3月10日

●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL <http://www.k5.dion.ne.jp/~beans-f/>
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

ママカフェ・ぱぱカフェから始める! 新しい“ふくしまの子育て支援”



ママカフェを作ろう!

ママカフェを始めたのは、新潟に避難している、あるママの言葉がきっかけでした。「いつか福島に戻ろうとは思いますが、私の居場所があるのか心配。福島のママ友とは連絡が途絶えているし…」「福島に戻るという事は、元いた場所に戻るだけではない」「戻って来たママ達が安心して集える場が必要だ」そう思った瞬間でした。

ママカフェに来始めたママ達は、緊張と不安でガチガチの心と身体でやってきます。そんなママ達を迎えるためにスタッフ全員で心がけているのが「笑顔と安心感」です。抱えていた不安や悩みを吐露したり、様々な情報交換をする中で、「悩んでいるのは私だけじゃないと安心した」「聞いてもらえてすっきりした」「ママカフェに来るようになって生きやすくなった」という声をいただいています。

ぱぱの居場所づくり

避難中のママやママカフェのママから要望があったのが「パパの居場所」です。そこで、ママカフェに来ていた育休中のパパに企画の段階から入ってもらいました。仕事帰りに立ち寄りやすいように、お酒を飲みながらとことん話す「語りBar」からスタート!「震災以降こんな話をしたことがありませんでした」というパパの感想を聞いたときに、男性にも「自分の思いを安心して話せる居場所」の必要性を感じました。ぱぱカフェは、ビーンズの男性スタッフに協力いただいています。回を重ねるごとに、男性同士の絆も深まっています。

◆ママカフェ

避難先から戻ってきた母親とその子どもを対象。福島市と郡山市では2013年6月～、いわき市と白河市では、12月～地域の子育て支援団体と連携して開催。2014年2月までの累計で大人251名、子ども230名 計481名が参加。

◆ぱぱカフェ

家族が避難している父親、家族が避難生活から戻ってきた父親を対象。福島市にて11月～開催。2014年2月までの累計で、9名が参加。

3回目の「3.11」を迎えて

あの日から3年、復興と言うにはまだ程遠いと感じる一方で、日々の営みを粛々と過ごしている中で思うことがあります。

福島の子どもの「遊び」問題を考えた時に、それは被災状況だけに起因するのではなく、もっと以前から「遊び場」は消え、子どもたちが外で遊ぶ姿は見られなかったのが現状で

した。そしてそのことが、子どもの育ちを阻害することにもなっていたのです。

また、就職できない若者たちの課題は、やはり被災後の問題として表れたのではなく、以前から存在し、そしてそれは福島や被災地のみの課題ではなく、日本社会全体が抱えている課題であったということです。それ

バトンを繋ぐ

参加しているママ達から、新たな動きも生まれています。自分達で立ち上げた居場所「てととと会」です。代表のSさんは、「支えてもらったからこそ、今度は自分達の足で立ちたい」と語ります。私達はママ達が本来持っていた力を、ほんの少し、あと押しただけです。彼女達の力強い一歩が、この3月に福島に戻ってくるママ達にとって大きな励みになるはず。そして、そんなママやパパがバトンを繋ぐように段々と増えて、その想いも厚く深くなっていくことが「ふくしまの子育て支援」の新しい形になるのでは、と思っています。

が、この福島の地で浮き彫りになってきたのです。

「ビーンズふくしま」はこの福島の地にいます。私たちは、この福島で課題と感じたことを解決していくために、これからも活動を続けていきます。どうぞ、これからも皆様のご支援ご協力をお願いします。

生きにくさを抱える子どもたち若者たちが、自ら望む姿で生きていける社会を創るために!

交流会・セミナーに参加して



全国のひきこもり・若者支援に携わっている支援者、ご家族や当事者の方々650名が、去る2月15・16日第9回大会が開催された大阪に集いました。

ビーズふくしまでは、ちょうど震災の年の2月に岐阜で開催された大会に参加して以来、実に3年ぶりの参加となりました。多くの方々が集い、熱気ある会場の中で、全国の支援者の皆さんと交流することができ、大変有意義な時間でしたので、その様子を報告させていただきます。

テーマ別実践交流会

就労支援と仕事おこし

ホームレス支援をしているNPO法人ビッグイシュー基金、若者支援をしているNPO法人みやこ自立サポートセンターの事例発表の後「支援制度のはざまに落ちた若者をどう支援するのか」「やさしい支援とは何か」という点で議論が進み、その中で地方における支援の可能性の高さが話題になりました。地方は都市に比べると家賃や生活に必要な金額が少なく農業も身近なので、若者が農作業を

通して自信をつけ社会性を養うことができ、少ない収入でも自立できる、とのことでした。都市部の方が何かと充実していて支援の幅があると思っただけでしたが、自立まで見据えた若者の就労支援に関しては、地方の方が見通しが明るいことに驚きました。つつい「ないもの」に目が向いてしまっていますが、すでにある資源に目を向け活用することの大切さに気付かされました。



テーマ別実践交流会

ひきこもりの高年齢化

報告のあった団体の調査では利用者層が高年齢化(平均33歳)してきていることが上げられ、全国調査でもほぼ同じ年齢になっていることから、ひきこもりが長期化し年齢が高くなってきていることが予測されます。それに比例して家族の年齢も高くなるため、保護者が年金受給世代になるなどして経済的な基盤が揺らぐこと、体力的な不安が高まること、家族との死別後の生活をどうするか、

などが高年齢化特有の課題として位置付けられると考えられます。

そんな中、課題解決への実践事例として興味深かったのが、親や当事者・元当事者の体験的知識を活用すること(生活支援ガイドブックの作成、居場所の運営など)です。実体験を通じた実践事例を積み重ねていくことで、「当事者」に限りなく寄り添った適切な支援制度が作られるのではないかと感じました。

特別シンポジウム

ひきこもり支援から出発して広範な若者支援へ

我々の活動領域に接続する若者が、なぜ?どんな?困難を抱えているのか?それらの起点は「教育」「労働」「福祉」の問題か?今日の社会が若者に関する「社会保障」をどう行い、何が欠如しているのかの問いの中で、「ひきこもり状態」「非ひきこもり状

態」の線引きを超えて、若者支援を作る必要が示唆されました。支援の在り方の提示ではなく、変革への挑戦の呼びかけと私には聞こえました。繋がりを分断する線引きを超える事が、包摂の可能性を広げる糸口だと話されていました。

ワーカー養成セミナー

支援者養成

冒頭、若者たちがいかに「ひきこもらざるをえない」状況にあるか(15~34歳の死因第1位「自殺」は先進国で日本のみ、失業や不安定就労における就労移行困難さ、など)が話され、ひきこもりを個人の課題として捉えるのではなく、集団、地域(コミュニティ)、社会の課題として捉える必要性が語られました。

そんな社会のシステムを変えていくために、支援者も含めた社会的共同の場をいかに作れるか、「やりたいこと」の達成のみではなく「やりたいことを共に作る」ことができるか、そしてそれを社会にいかに発信していくか、がこれからの実践現場で求められる指標になってくるのだと実感しました。

就労支援

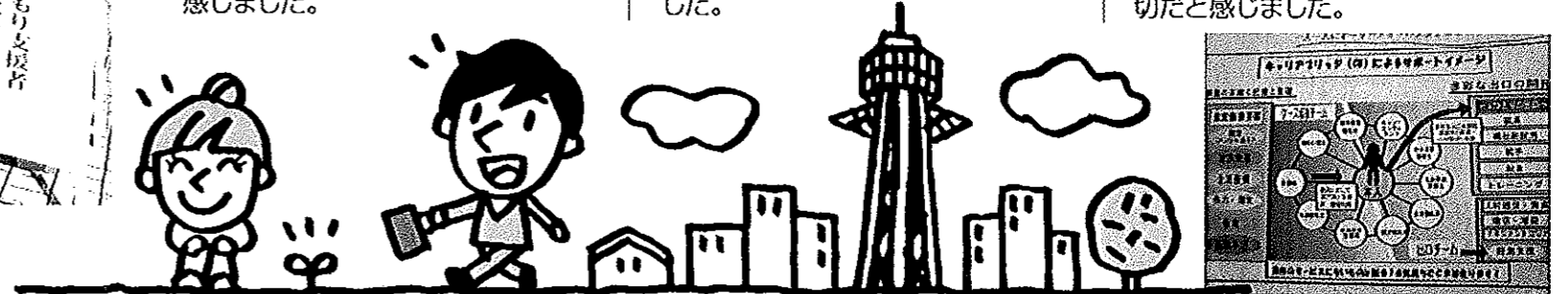
NPO法人文化学習協同ネットワークにおける中間的就労の事例が紹介され、若者に仕事体験をさせる場合について話し合われました。質問することが怖くない職場づくり、他人と関係しながら仕事をすすめていける職場づくり、「こんな仕事に携われた」と誇りを持てるようなプログラム作りなどが大切であると学びました。また、モチベーションのある若者と困難を抱える若者はお互いを別世界の住人と思っているところがあるが、就労問題を解決していくためには両者を含めた若者全体でとらえていくことが肝心である、との意見も出され、今後の若者支援を考える上で大きなヒントを得ることができました。

地域ネットワーク形成

若者たちが、生きる・働く地域づくり「すべての人に、居場所と出番とつながり」をコンセプトに、若者たちが継続的に生きる・働ける地域づくりをキャリアブリッジの実践から学びました。

事務所内に様々な分野の専門家が介しケース応援チームを形成し迅速に対応できる環境づくりや、地域資源(出口)を広げるため豊中市内の企業・医療福祉・就労支援・教育等、地域の中で繋がったネットワーク先を細かくマッピングし可視化し意識できるような工夫を行っていました。

年齢・状況に合わせた切れ目ない支援を地域で支えること、「生きていくイメージがもてる」まちづくりが大切だと感じました。



福島 haja project シンポジウム

全国社会的ひきこもり支援者実践交流会の翌日、『福島haja projectシンポジウム』が行われました。

ものです。

始動したばかりで具体的なビジョンや、どのような地域の創造なのかが見えていない中、どのような実践をしていけばいいのか、「今は見えないけど、とりあえずやってみよう!」と一緒に考える仲間を全国に募っている段階です。シンポジウムの中では「仲間になってください!」と呼びかけるメッセージと、これ以上の孤立を福島で生みたくないという叫びが大きかったように思います。

そもそも、Hajaセンターとは、韓国ソウル市にある「青少年職業体験センター」で、Haja=やってみよう、という意味です。Hajaセンターでは、

地域の力を借りながら子ども・若者など様々な人が集まって出た「やってみよう!」を応援し、その経験の中で生きていくための力を身に付ける実践を行っています。例えば、ノリ(韓国語で「遊び」という意味)団とって産業廃棄物を使って楽器を作り、表現活動を行っている団体や、職業体験であるパリスタ、旅行会社、カフェ、または音楽スタジオ、フリースクールなど様々なことができる複合文化施設のような場所です。

Hajaセンターは、「はじめの一歩」を創造することを大切にしています。『福島haja projectシンポジウム』では、震災以降、以前からの問題に増

して「未来を創造すること」に不安を抱える福島で、地域をなくすかもしれないと不安を抱えている若者たちと、自分が生きていく地域をつくることできないか。これ以上の孤立化をふせぐために、対処ではなく、未来を語り合い創造することを積極的に今、福島で実践したい。そんな思いが強く表れていました。

「故郷を取り戻したいんです!」その言葉に、生きていくための心のよりどころとなるプラットフォームを、今だからこそ福島を基盤に構築していくことが、福島だけではなく日本の社会に求められていると感じました。